

# たけの子を 卒園によせて



私が、たけの子に関わらせていただくようになったのは2013年、次男が一歳の時でした。当時、私は2011年より、長男と南陽市に原発事故のため母子で自主避難をしていました。高畠町の同じ自主避難のお友達や、南陽市社協の菅原さんの情報で初めてたけの子を訪れることになるのです。国や、行政は、避難の必要は無いと、言われる地域からの避難で、住んだことの無い町で生活するのに、行政のお茶会と同じくらい『同じ気持ちの人』と、繋がれるスポットでした。

たけの子の活動を面白そうと感じつつも、送迎や保育料の問題から入園までには、至りませんでした。

2019年、次男の小学校入学に伴い、福島に帰還するにあたり、学校、『放射能の不安』、『山形の知り合いと繋がっていたい』、『保育料無償化スタート』と重なり、琴音をたけの子にお願いすることになります。



田舎の祖母の家に預ける感覚で、春夏秋冬、峠を越えて、福島から米沢へ3年の日々。

焚き火を囲んで朝の会、田植えや資源回収、キャンプに、芋掘り、川遊びや、ザリガニ採り、味噌作りや醤油作り……。まるで、昭和の子どもの遊びを観ている気分でした。

わたしが幼い頃から、すでに日本は、面倒なこと、煩わしいことは少なく、便利、快適な暮らしが普通になっています。それで、日本の幸福度が上がったかと言うと、100パーセントYESとは、言い切れないと思います。

自然と共にある、たけの子ライフでは、『先生』が不在で、保育者を『へんみさん』『はやさかさん』と呼んでいて、保育者も子どもも、一緒になって、遊びます。子どもたちが、一日のやりたいことを、自分で決めて、手や身体、頭を使って何でもします。そう過

す中、観察力、注意力、作業の段取り、知恵の働き、工夫する力、新しい物事を生み出す力が、身に付いていくように感じます。

3年間、たけの子に関わらせていただき、福島原発事故の放射能から、子どもたちを守る幼稚園という認識から現代の子ども達、いや、母親にも、とても、豊かで、大切なことを学べる園だと、見方が変わりました。

幼い琴音が、青空の下、広い野山で、思う存分遊べたことに、こんな、コロナ禍も重なり、心から幸せなことだと感じています。親の私も、育児や生き方で悩んでいるときに相談に乗っていただいた事が、どれだけありがたく、支えになった事に心から感謝しております。

これからも、豊かな自然と共に、大好きな、たけの子が続いてくださることを願っています。

卒園児保護者 佐藤いつ香

